

ホームシアター

別冊 **HIVI** 季刊 HOME THEATER 2003 SUMMER Vol.22

スピーカーを選ぶなら5.1chで!
いま話題の最新40システムを全部聴く

音のいい部屋をつくるために
布袋寅泰のプライベートシアターを訪ねる
清里のリゾートシアター
スウェーデンハウスのDIYシアター
全国腕自慢インストーラーを訪ねて <東日本篇>
HTおすすめDVDガイド



につぼん ホームシアター 紳士録

第7回

伏木雅昭さん

ドルビーラボラトリーズインターナショナルサービスインク日本担当副社長

わが国でホームシタ

ーの普及・啓蒙活動に尽力されてきた方たちの足跡を辿る「につぼんホームシアター紳士録」。第7回目の今回は、ドルビーラボ日本支社長の伏木雅昭さんにご登場いただきます。

伏木さんと編集部との付き合いは長い。

HiVi最初のヒット企画と言ってもいい85年5月号の特集「映画は音だ!?」ドルビーサラウンド大研究」。そこに「ドルビーステレオ映画をウチで楽しむと……」(映画の音の歩みを振り返る)という原稿を書いてもらって以来のお付き合いだから、かれこれ20年近くになる計算だ。

当時、すでに伏木さんはドルビーサラウンドの普及促進業務を担当されていたわけだが、

家庭用のオーディオ/AV機器ばかり追いかけていた当時の編集部は、映画の音についてはからつきし疎く、ドルビーステレオ映画が誕生した背景やその意義を分かりやすく書いてくださった伏木さんの原稿を何度も読み返してはペンキョーしたものだ。

*

ドルビーの前はティアックにおられたんですよね。

「そうです。73年に入社し、5年ほどおりました。外国部に席を置き、海外市場のフィードバックと販売促進業務、それに海外向け商品企画の仕事を。当時ティアックは国内のテープレコーダー高級機市場でたいへん強かったのですが、海外は事情が異なり、独自に商

品企画を行なう必要があったんです」

—— 大学は東大でしたか。

「ええ、仏文です。もともとオーディオ好きのラジオ少年。エンジニア志望でしたが、語学も好きだったので。フランス語、今はだいぶ錆びついてますけどね。学生時代は合唱部に入っていて録音担当。で、結局就職は録音機メーカーを選んだ。当時、吉祥寺に住んでいて三鷹のティアック、近かったし(笑)」

—— ご出身は？

「広島です。広島市のスラム街育ち。映画館の裏に住んでいて、小学生の頃から横からこっそり(笑)。入り浸ってました」

—— ティアック時代からドルビーラボとは付き合いがあったわけですか。

「ティアックはかなり早い時期からドルビーのノイズリダクション(NR)を採用していましたが、私自身は仕事で直接的に絡むことはなかったですね。外国部の仕事も面白かったのですが、ドルビーからウチで仕事をしないかというオファーがあつて、とりあえず2〜3年やってみるか。自分たちの技術をメーカーに持つていって勝負するというスタイルが興味深かったし、ドルビーに入れば、業界の素晴らしい方々と会えるかなと思って。それで、79年にドルビーのライセンス業務を行なっていたコンチネンタルファーマーイーストという会社に入社するんです」

—— 最初はテープレコーダーのNRライセンス供与が主な仕事ですか。

「そうです。カセットテープが主な仕事でし

た。ビデオはと言うと、リニアトラックがやつとステレオ化された時代。リニアトラックはS/N悪いですから、ドルビーのNRを使つて下さいって一所懸命アピール。それで業務用VCRにドルビーBが入り始めた」

—— その後、ハイファイビデオが登場し、ビデオレンタルが一般化。LDの活性化とともに家庭で映画をマジメに観るといふカルチャーが育ち始め、85年の春にNECからドルビーサラウンドデコーダー内蔵AVセンターAV300がデビューする。

「実は当初サンフランシスコの本社は、サラウンドデコーダーの民生展開なんて全然考えていなかったんです。ただ、技術がころがっていた。サラウンド情報を引っ張り出す回路を積んだ小さな箱がね。」

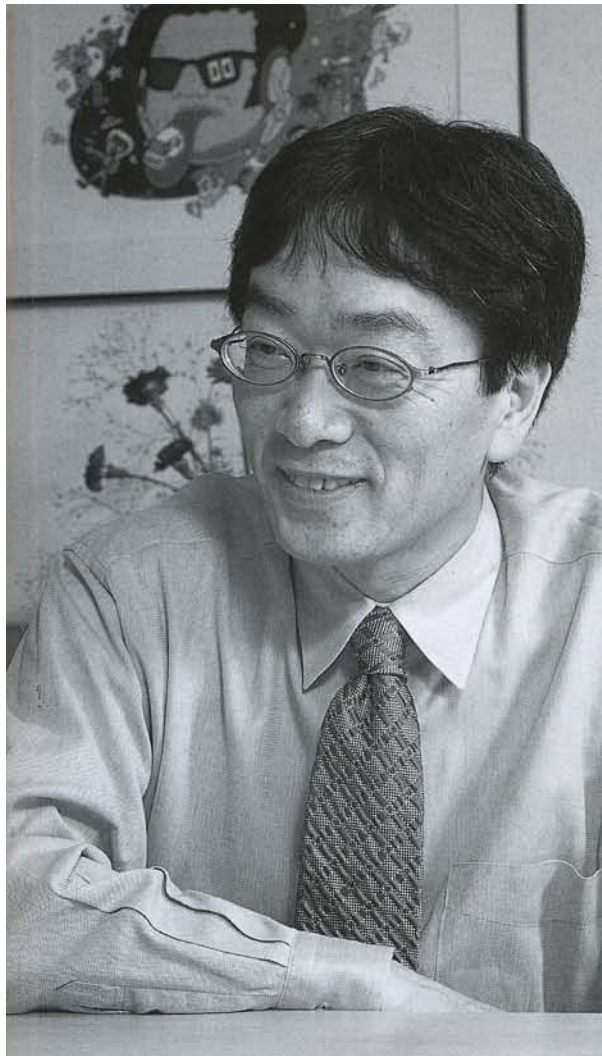
80年に「地獄の黙示録」をスプリットサラウンドで上映することになり、本社から技術者が来日して一緒に仕事をし、その音を聴いてはくらは大感激したんです。で、ステレオ映画ソフトにはドルビーエンコードされたL、Rの情報が入っている。この箱を通せば、家庭でもサラウンドで映画が見られるじゃないかと日本チームで盛り上がり、音響メーカーにその採用を持ちかける運動を始めた。それがNECのAV300に結実するんです」

—— 最初は簡易型デコーダーで、映画館と違ってロジック回路が入っていないかった。

「ええ。だけど、ホームビデオがリアチャンネルを持ったということがたいへん重要だったんですね。面白さが全然違う。そしてAV300が予想以上の大ヒット。87年には劇場と同じロジック回路を持つ「プロロジック」の提案に至るんです」

—— その頃伏木さんは、放送局にドルビーサラウンドの採用を働きかける活動も熱心に行っていましたね。

「サラウンドシステムを持つユーザーがどん



どん増えていたわけですから、映画だけじゃなくて、音楽ソフトでも放送でもサラウンドが楽しめる、そんな環境づくりをしたかったです。FMのラジオドラマを皮切りに高校野球や大相撲などでもドルビーサラウンドが採用されるようになった。紅白歌合戦までやりましたけど、NHKですからドルビーサラウンドとは言ってくれなくて「この放送はサラウンドステレオでお送りしています」なんてアナウンスが流れたものです。

この活動も日本が先行したんですよ。われわれの動きを見て、その後放送局にエンコーダーを販売するようになり、アメリカ、ヨーロッパで局へのプロモーションが始まった。そして、デジタルサウンドトラックの90年代に突入。92年の「バットマン・リターンズ」でドルビーデジタルの劇場上映が始まり、95年にはLDでの家庭用の展開が。Lt/Rtのアナログ光学トラックは残したままで、スピーカーホール間にAC3でコーディングされたドルビーデジタルの信号を記録する。鮮やかな技術提案だと思いました。

「そうですね。我ながらドルビー凄いって思いましたよ(笑)。本社のエンジニアに聞くと、フィルムを吟味してみると、スピーカーホールの間がいちばん安定しているって言うんです。ドルビーデジタルに先んじて、90年にCDSという会社が5ch分のリニアPCM音

声をフィルム上に記録して上映するという提案を行なったんですが、アナログ音声のバックアップがなく、しかも安定にデジタル音声が入り込んでくると結局姿を消してしまっている。プロの世界では何にも増して安定性が優先されますからね。

その後、VHSにドルビーデジタルを入れませんかとか働きかけをするんですが、うまくいかなくて。パイオニアの市川さんと知り合ってからLDでの採用がほとんど拍子で決まるんです(前号本欄参照)。

95年のCES(家庭用電子機器の世界最大の展示会)でドルビーデジタルのLDデモをやることになって、ハリウッドのスタジオにあるので俳優の顔は出さなくちゃいけない。だから、後ろ姿ばかり出てくるヘンなデモディスクをつくったりしました(笑)。

私はサラウンドは無から生れた業界の財産だと思っただけです。その考えにパイオニアさんも賛同してくれて、CESの会場でドルビーデジタルのデコーダー基板とデモディスクを配って歩いたんです。何か技術提案をする、それが光るモノであれば必ず支持して下さる方がいる。ドルビーデジタルの場合は、それがパイオニアの市川さんだった。そして、そういう人がいて初めて事態が動き始める。やはり人なんです。強い思いを持った人を

巻き込めるかどうか……」

——その動きがDVDへの採用に結びついていくんですね。

「そうですね。LDでの採用がなければ、DVDにドルビーデジタルが入ることはなかったかもしれません。DVDフォーラムの幹事会社は、MPPEGオーディオを進めているからって、当初は否定的な対応でした。

映画ソフトはダイアログ以外の音楽と効果音は世界共通にしておいて、ステレオで各国語を用意し、プレーヤー側でその国の言葉を選択して、音楽と効果音をミックスして出力すればいいなんて言うメーカーもあった。だけど、国によって編集が少しずつ違うので、尺(長さ)がすべて異なる。例えば最近では、「パールハーバー」が日本とアメリカでシーンがかなり違っていて話題になりましたね。だから各国ごとに音声全部ワンパッケージにしたトラックを完成させなければ駄目、しかもこれからは5・1chが主流です、現にLDはやっていきますよってフォーラムの中心メンバーを説得していったわけです。

それで、NTSC圏はドルビーデジタル、PAL圏はMPPEGということで決着しましたが、MPPEGの5・1chエンコーダーが目の見えず、結果的にはドルビーデジタルがDVDビデオの世界標準になりました」

——それと合い前後してドルビーラボの日本支社を立ち上げるんですね。

「ええ。5年前の97年です。ちょうどその頃がBSデジタル放送の音声フォーマットを決める時期で、ドルビーデジタルの採用を働きかける活動が充分に出来なかつたんですよ。新しいオフィスに引っ越してから巻き返しに出たんですけど、結局MPPEG-ACCに決まって……。DVDと同じドルビーデジタルに決まっていれば、ユーザーの混乱は少なかったとは思いますが、当時の郵政省は、とに

かく最新のデジタル方式で行こうという意識が強かったんだと思いません。現実市場で受け皿が出来ていのが何かということよりもね」

——さて、ドルビーデジタルの提案以降、ドルビーデジタルEX、プロロジックII、ドルビーヘッドフォンと多彩な展開が続いていますが、今後のマルチチャンネルの行方は?

「現在、次世代デジタルシネマの音声フォーマットがSMPTTE(映画テレビ技術者協会)で議論されており、48kHz/24ビットで16ch(プログラムとしては最大14ch。2ch分はサービス用)という提案に落ち着きそうです。しかし、これはあくまでも器の話であって、16chがフルに運用されるコンテンツがすぐに出てくるという話ではないし、その場合も5・1chとの再生互換は必ず維持されます。いっぽうDVD等でも5・1chから6・1へとチャンネル数を増やす伝送系の提案が相次いでいますが、再生環境に応じてそれを2でも4でも8でも好きなチャンネル数で楽しめる無段階のフレキシブルな系を確立したいというのがドルビーの考えです。

予算や環境に合わせて構築した再生システムで、誰もが制作者が意図した音響設計の妙味を満喫できるようにすること。それがドルビーの考える最終ゴールと言っていると思います」

(取材・文 本誌/山本浩司)



↑東京都中央区のドルビーラボ日本支社デモルームで

サンフランシスコの本社は サラウンドデコーダーの民生展開なんて 全然考えていなかっただけですよ。 ただ、技術がころがっていた。